

お咲等と一緒に行き度いやうな気がしました。

で、加藤さんは二回づゝ、二人に與へました。

「これで間に合ふね」

「え、もう澤山！ どうも有難う御座います」二人は恥かしさうに、そして嬉しさうに頭を下げました。

加藤さんは私の顔を見てちらと微笑しました。「あゝ喜ぶんだから、いぢらしいね」女達が遠ざかった時、彼は私に囁きました。

「え」と、私も微笑を返しましたが、自分を云はれるやうに、自分がなさけなくなつて來ました。

……

研究室で一日楽しく遊んで來た次の日、

「オイ面白かつたか？」と、聞かれても、お咲とお駒は手をつなぎ合つて、

「フム、フム、フム、フム、」と、零れるやうに笑ひ合つてゐました。明らかに、今に皆を吃驚りさし

てやらうと、たくらんでゐるのです。折々扉の外へ行つては、何か隠して置いたものが失くなり
はしないかと、氣にしてゐるらしいです。

「何んか隠して置くな？」藥劑師の耳が云ひました。「よし探し出してやる」彼は嚇かして部屋の外
に出ようとする。

「いやよ、いやよ」と、二人は戸口に立ち塞がりました。

女達の計畫では午飯の時出す積りだつたのが、到頭堪へ切れなくなりました。同僚もその日は昨
日一日の遊樂のため、だれて居りました。専門學校出の一人なんかは、「斯んな頭のぼんやりしてゐ
る日にやると、僕の仕事は爆發させるといけない」と明かに加藤さんに聞えるやうに云つて、朝か
ら殆どぶら／＼してました。

彼女達は風呂敷包を一つづゝ胸に抱へて、部屋へ忍ぶやうに這入つて來ました。そして、食卓の
上にのせました。

「何んだ、何んだ」期せずして、だれてゐた同僚達は其處に集まりました。

「皆さんにお土産買つて來たの！」お咲が叫びました。紅梅焼の包が一つの風呂敷敷から出ました。

「矢つ張り國技館と淺草へ行つたのか？」

「え、もうそれは、菊人形は綺麗ですよ」お駒の方が却つて元氣な位に云ひました。皆は思はず彼女を見ました。それでも常のやうに少しも恥かしがりません。眼の縁を消耗性の赤味で一杯にして、口の隅に泡をため乍ら喋りました。「ね、ほら、此處に繪端書がありますわ、常盤御前だの、刈萱道心だの、皆んな、役者の似顔よ。それにね、あの大きな建物一杯にイルミネーションがついて、八段返しなんかそれは綺麗ですわ。斯うね、ばたりと返ると、その度に電氣に照らされた綺麗なお人形が現はれて来るのよ、ねえ咲ちゃん」彼女は両手を動かして夢中になつてゐました。

「さア、どうぞお上り下さい！」お咲が云ひました。そして今度は別な風呂敷を擴げました。紙で造つた紅葉の葉がついてる小枝に、ぼん／＼玉の這入つた袋が吊してあるのが、七つ出て來ました。「やア、こいつは素的！」彌次の連中はその枝を高く持ち上げて騒ぎ廻りました。

「それからこれはね、加藤さんの赤ちゃんに、皆んな二人で買つて來たのよ」と、三寸位の着物を着せた人形が出て來ました。

「可愛い、でせう！」お駒が人形を見て叫びました。

「僕の子供に又買つて來たのか、有難う、それでお金は間に合つたか？」

「え、活動も見たいし、おすしも喰べたわ」

「活動は何を見た？」誰か云ひました。

「オペラ館！ 新派悲劇よ。それは哀れよ！」と、お駒が云つたのですが、「哀れよ！」で皆笑ひ出しました。でもお駒は夢中でした。お咲が素早く駆け出して、番茶の土瓶を提げて來ました。同僚はベツヘルで番茶を飲み乍ら、紅梅焼を喰つたり、紅葉の枝を持ち廻つたり、部屋中わ／＼騒ぎました。

「あゝあ、あたい本統に嬉しかった、嬉しくつて、嬉しくつて……」と、尙ほもお駒は顔を赤くしてゐました。

「そんなに嬉しかったか？」加藤さんは彼女にききました。

「えつ！ だつて、あたい電車にも五年振りに乗つたんですもの！」と迄、彼女は白狀して了ひました。

「えっ！」加藤さんは眼を圓くしましたが、「さうか〜」と、胡麻化しました。私もその時吃驚しました。然し同僚の中には、それを聞かずに騒いでゐた者もありました。(毎日電車の顔を見てゐ乍ら、五年振りに乗つたなどと、東京に斯んなものがあり得るだらうか？ 常に自動車馬車で歩く人はいざ知らず……)私はお駒の顔を見て何とも云はれない感じになりました。

皆のわい〜は中々止みませんでした。到頭紅梅焼の最後の一枚迄喰つて、菊人形の繪はがきを一枚と、ぼん〜を吊した紅葉の枝を一本持つて各々の實驗臺に歸りました。ある者はその枝を試薬棚の上に立て、騒いでゐました。女達二人は皆が騒ぐのを見て、全く嬉しさうに満足してゐました。

その夕の退けには、或る者は巫山戯て紅葉の枝を高くかさし、或る者は上着の下に入れたりして、工場を出ました。私はその晩も、あの物置部屋でお咲に會ひました。

八

年末になつて、美枝子の叔父——と云つても、祖父の小さい弟です——で、上海のM物産會社の支店長をしてゐる人から、美枝子にお歳暮だと云つて五百圓の小切手を送つて來ました。私も年末賞與を貰つた許りですが、そのお歳暮の方が私の賞與の約二倍なのです。會社では殆ど無理に株主に配當をして、賞與が少ないと云ふのは同僚の評判でした。まア、金高よりも私はその頃會社にも興味がなくなりました。私はアトロピンの收得量を約五パーセント上げることが出來ました。そのため一ヶ月に浮き上る利益は優に私の如き者を備つて置く二三年分の給金以上になる筈でした。然し、技術の方がいくらよくなつたつて駄目です、一切は商品の相場です、日に幾度と變る相場に、全く私達の勞役は少しの省みらるゝ所なく左右されて了ふのです——まア、それは横道の話です。で、美枝子はその小切手が來た頃、正月の準備のため、婆やを連れて來て置きました。彼女は何んと思つたか大騒ぎをして、毎日髪結ひを呼んで、でこ〜に大きな丸髻を結ひました。そして或る朝彼女は俾で、日本橋のM銀行の本店迄小切手を現金に引き換へに行きました。

工場にゐた私の處に午過ぎでしたが、大森から電話が來ました。
「ね、實は僕今、君の奥さんに會つた。と、その前に言はねばならないが、實は喜んで呉れ給へ、

今度の變り目でね、僕は倫敦の支店にやられるように内定してるんだ、二三日前に僕も知つたんだが、で君ん處に早速知らせたかつたが、未だ内定だから黙つてゐた次第だ。所が今日の午、——僕等同僚はいつも三越の食堂で晝飯を食ふ事になつてゐるのだが、——其處で君の奥さんに、ばつたり會つたんだ。何んでも僕等の銀行に用事があつて來たさうだが、僕は三階にゐるからそれは知らなかつた。でね、話してる中に僕が倫敦に行くと言つたらね、餞別を買つて上げるつて云ふんだ。僕はお斷りした、勿論呉れるなら貰ふが、奥さん一人からでは厭だつて云つたんだ、處が奥さんは妾は夫の意志も代表してるからつてね、とてつもない高い銀の巻煙草入れと、それから眞珠入りのネクタイピンを無理に買つて呉れたんだ。僕は實は聊か閉口したが、買つて了つたのだし、受取れつて泣き出しさうに云ふから、僕は貰つて今銀行へ歸つてるんだが、餘り心配になつたから、僕から一度君に前以て話して置き度いと思つたんだ。あんな高い物を貰つてもいいか？」

私は電話口で苦い顔をしました。然し實際大森にはその位の物をやつてもいいものではあります、美枝子が勝手にそんな事するのは不愉快でした。

「ウム、勿論、いよよ、もつと上げなければならぬんだから。然し兎に角倫敦に行けるのはお目出度う、僕のやうに年中工場にゐる者は可哀さうなものだ」

「本統にいよよのか、ぢや有難う。倫敦でも安い月給ぢや詰らないだらう。その中に君も來給へ。幸田にも多分向うで會へるだらうと思つて楽しみだ。ぢや何れ又お禮に行く、年末で馬鹿に忙がしいからこれで失敬！」

「あゝ、是非遊びに來給へ、さよなら」と、私は電話を切りました。

私の頭には、三越のあの賑かな人中で、どこ／＼に大丸髷に結つた美枝子が大森に、「是非取つて頂戴！ ね、ね！」と、眼尻に皺をよせて甘えかゝつてゐる姿がはつきり見えて來ました。或は眞珠のピンを大森の襟に手づから指してやる位の事はしたかも知れません。……私は終日苦い顔をしてゐました。

その夕は急いで、家へ歸りました。

「ね、大森さんが倫敦の支店にいらつしやる事になつたんですつて、今日三越で會つたのよ。それでね、妾が餞別を上げましたわ、何を上げたと思ひなすつて？」

「知つてるよ、すつかり知つてるよ」

「あら、本統？ どうしてお知りになつてるの？」彼女は失望したやうな顔をしました。

「ウム」

「本統、どうして知つてなさるの？……あゝ、大森さんが電話であなたに云つたの？」

「大森はあんな高價なものを貰つていゝかつて、心配してたぜ」

「えゝ、あの方、いつもに似合はなく遠慮するのよ。奥さん一人から貰はれないつて、でね、妾は夫の意志も代表してるんですつて、威張つてやつたの、いゝでせう？」

「ウム、まアいゝ」

「それでね、あなたにも大森さんと對のピンを買つて來ましたわ」彼女は、今日の買ひ物を私の書齋の圓卓子の上に並べて話してゐるのでした。彼女は私にその他、ネクタイを二本許り買つて來ました。彼女はネクタイと、半襟に非常な趣味を持つてゐるのです。彼女自身は黒い毛皮のボアを買つて來ました。

「これを掛けちや、あんまり奥さんじみるか知ら。ちよつと見て頂戴！」彼女はボアを頸に巻いてぐるつと一とめぐり、身體を廻して見せました。肥つてはゐないが、小柄な彼女が赤い手絡をかけ

た丸鬚を結つて、黒い毛皮を首に巻いた所は一寸珍妙なものでした。小さな頤がすつかり毛皮に埋まりました。

「ウム、いゝよ、其の儘で寫眞をとつて、兄さんに送つてやるといゝ」

「え、さうしませう。大森さんがね、三越の食堂で私を見附けると直ぐ「やア、奥さん！ でこでこ丸鬚は素的ですね！」つて、大きな聲を出すのよ。妾随分極まりが悪かつたわ。……それでね大森さんは倫敦で兄さんに會へるだらうつて、喜んでましたわ」

「さうか」

卓上には彼女が買ひ込んで來た克子や、仙臺の弟達に贈るクリスマスの贈物も澤山ありました。

一月の末近く大森は神戸から出帆するので、東京驛から發つて行きました。

その頃は議會が開かれてゐるので、美枝子の祖父は上京して居りました。美枝子は電話で祖父の後を追つては何かねだつてゐました。然し祖父を中々掴めずに、やつと掴めても、待つた、待つたと云はれてゐる中に、二月に入つて了ひました。

二月になつてからは、もう春になつたのではあるまいかと思はれる程、温かい沁みるやうな、そして乾燥した、いゝ天氣が續きました。梅の花もぼつ／＼綻び初めたのです。工場に行き乍ら郊外の景色を見渡すと、(あれ、あんな處にあんな形のいゝ木があつたらうか?)と、思はず見上げるやうな、素枯れた脊の高い木が、細い枝を一樣に青い空に向けてゐるのに気がつきました。電車の中から見える土手には去年の草の下に新しい軟かい緑の草が芽を出してゐました。研究室でも南の窓からとろ／＼とした温かい日が射して來ました。靜かに椅子によつて眼をつぶると、虻や蜂の羽根の唸りが響いて來るのではあるまいかとさへ思はれました。そんな時私の頭には美枝子が浮んで來ました。(あれは本統は全く無邪氣で、子供なんだ、唯餘りにスポイルされてゐる……それならそれを導いてやるのは俺の責任の筈だ、さうだ／＼俺は今迄何と云ふ無責任の馬鹿だつたらう? それにしてはあのお咲の奴! もう絶対に遠ざけねばならない、あの畜生! あの小馬! 何と云ふつや／＼した、頬つぺたを持つてやがるんだ! あゝあゝあゝ)私はさう考へて來ると居ても立つても居られないやうな感じになりました。然し眼を明けて見ると、その日はお咲は妙にいそ／＼して落ちつかないやうに見えました。(どうしたと云ふんだ! 馬鹿め!)さう罵つて見ますが、彼女の

様子は實際少し平常と違つてゐるので、何に對してか妬ましくなつて來て、俄かに心臓が波打ちました。(どうしたんだらう? スんな筈はないのだが、あの女がどうあらうと俺に關した事ではな

し)

果して彼女は紙片れを渡して行きました。胸が冷やりとして、氣が重くなりました。仕事を續ける氣力さへなくなつたのです。私は應接間に行つて、恐ろしいものでも見るやうな氣がして、その紙片をひらきました。「ぜ、しないはなしがありません、きて。あなたの咲子より」私は思はず急いで紙片をひきさいて、窓の外に捨てました。(何んだらう?)さう呟きましたが、私の頭には或る考へがちやんと浮んでゐました。(もう駄目だ! あゝあゝ)あなたの咲子より」なんかと書いたのも初めてだ! ……

物置部屋の黒い箱に背中を寄せて、お咲は寒さうに兩手を脇に抱へ込んで頸垂れてゐました。小さな四角な箱の火鉢に火が少し許り入れて前に置いてあるのですが、彼女は手を出さうともしませんでした。私が這入つて來ても彼女は顔を上げません。

「どうしたんだ?」と、私は少し顔へ乍ら訊きましたが暫らく彼女は顔を上げませんでした。

「ねえ、あたいね、お嫁に行くの」

「何時！ 何處へ！ 何故行くんだ？」

「何故つて、あたいも随分考へたのよ、もう十九でせう、それに今度世話して呉れる人もしつかりしてるいゝ人ですし、お母さんも行け行けつて云ふのよ、ね、今度はあたいもすつかり心をきめたの？」

「然し〜、どんな人へ行くんだい？」

「淀橋の煙草工場へ出てる人なんです、随分いゝ手を持つてるし、辛棒人だつて云ふのよ。向うには年取つたお母さんが一人あるんですが、その人もいゝ人ださうですし、それにその人は親孝行で近所で評判だつて云ふのよ」

「でも、咲ちやん何故今からお嫁に行くんだ？ 何時か未だ〜行かないつて云つてたぢやないか？」

「だつて、あの頃はさう思つてゐたのよ、でも今度は、あたい眞個に心をきめたの。あたい山崎さんにさう云はれるのは本統に辛いのよ……あたい、山崎さんに可愛がつて戴いたのは本統に嬉しい

の、あたい一生忘れません、屹度忘れません。れこからはあたい苦勞しなくちやならないのはちやんと分つてますわ。でも、どうしたつて今度は身を固めますわ。本統に可愛がつて戴いたのは嬉しいのよ、嬉しいのよ」彼女は疊に顔を伏せてゐました。

「だつて未だ嫁かなくつたつていゝぢやないか、十九やそこらで。ウム、ウム」私は彼女を打ちのめし度い衝動に驅られて、身體がぶる〜顫へてゐました。

「あたい、さう云はれるのは何より辛い、何より辛いよ、もう本統にせめないで頂戴、あたい〜どなん事しても心を變へないと、きめたんです。本統に可愛がつて戴いたのは一生忘れません、ね、どうぞ、ね……だつて、だつて、山崎さんには立派に奥様があるでせう！」（あつ！ さうだ、俺はやられて了つた。俺に此の女をせめる事が出来るか？ でも〜……）

「ね、どうぞ許して頂戴！」

「それでもう會社は止すのか？」

「え、向うちや是非今月中と云ふのです、だからもう三四日で工場は止しますわ……お別れですわ、本統にあの研究室は面白かつたの、あたい、山崎さんがお出でになる少し前の春から、あの部屋に

行つたの、初めは包装部にゐたんですけど……本統に嬉しかつたわ……許して頂戴！」

「ウム、仕方がないさ……」

「本統にあたい、可愛がつて戴いたのは一生忘れません！……」

「……」

私は頭の中がぐらく／＼になつて、何を云つていゝのか、斯う何もかもぼう／＼として言葉を忘れたやうになつてました。彼女は一旦顔を上げてから、又私の身體にもたれて來ました。二人は息苦しい沈黙を續けてゐました。

「……もう、あたい、くよく／＼しない！」彼女は顔を上げました。……

一緒に二階を降りようとなりました。

「……ね、あたい、そら去年の夏、初めて宿直部屋へ行つた時の事、いつでも思ひ出しますわ……」

臺所口から出て、路次を抜けると、彼女は思ひ切つたやうに、振り向きもしないで私とは反對の方向に小走りに走り去つて了ひました。

私は自分の家の門を潜りました。

「あらつー お歸んなさい。随分遅う御座いましたのねえ。ね、お祖父さんが近い中に妾達二人を吃驚させてやるつて……」

「……」

美枝子と私は明るい茶の間に這入りました。

「あらつー まア、どうなすつたのです？ そのお顔色！……お氣分が悪くわらつしやるの……」

「ウム、少し頭が重い、夕飯は欲しくないよ」

「さうですか、直ぐおよりになるといゝんですわ、ねえや／＼」

「ウム、呼ばなくともいゝ」私はさう云つて、二階の書齋に上りました。

「ねえや、お召し物をこちらへ持つて來て……」彼女は下女にさう命じ乍ら私について二階に上つて來ました。

ソオファにどつかり腰を下ろして、額に手を當てましたが、どうも妻が斯うして何くれと心配し

て私の顔を覗き込んだりするのが、變な氣がして堪りませんでした。(下女が来て着物を美枝子に渡した。下女はくるく廻つてマッチを探し出して瓦斯ストーヴに火を點する、ぽつと音を立て、瓦斯に火がついたが、それがじい／＼音を立てる。……)

「さア、どうぞ冷めない中に」美枝子は着物を温めて置いて呉れたのです。私は(變だな、變だな)と自分が立ち上つて、人形のやうに外套や上着を脱いだりするのが不思議になりました。(する／＼と、ネクタイが旨く解けて呉れるかな、どうも此のタイはどうかすると引つか／＼つて困る、お／＼でも旨く解けた。今度はカラーだ……美枝子の奴、脊が低いんで、一寸後から飛び上り乍ら着物を引つけたな……何んだつて美枝子は斯ううるさく物を問うんだらう、全るで指先きについた赤インキだ、どうも、そつちにもこつちにも附いてやがる、何んて煩さい……)

「ウム、大した事はないよー」(そらく、あれを呉れ、あれ)「ウキスキーを少し飲まして呉れ」

「まア、そんなもの飲んでよう御座いますか？」

「却つていゝさ、どうも頭が重いんだ」

美枝子は下女を呼ばずに自分で走つて降りて行きました。(畜生！ 煙草工場の職工か、馬鹿にし

てやがる。身を固めるんだつて、フン、いゝお上さん振りをしやがるだらうな。……あれ／＼俺は何を考へてるんだ、そら美枝子の足音がする……)

「甘いのと割りませうねー」彼女は洋酒の瓶の載つた盆を卓子の上に置いて小さなグラスにキュラソーとウキスキーをちやんぼんに注いで呉れました。

「あらつ、もつと」彼女は仕方がなささうに、二杯目を注ぎました。更に私は空のグラスを出しました。

「もう、お止しなさいー」

「ウム、止す……」

氣持ちよく腹の中が熱くなつて來ました。美枝子は私と並んでソファに掛けて、ちつと黙つておりました。私はぼんやり向うの顔の繪を見ておりました。

「あなた、何か妾に隠してらつしやる心配事があるんぢやない？」

「ウム、何もない」

「いや、屹度お有りになるんでせう？ 妾、此の間から御様子が變だと思つてましたの、え、隠さ

すに云つて下さる」

「そんなものがあるものか、俺はお前に何も隠した事はないぢやないか」

「え、それはさうですけれど……」

「今、俺は頭が痛いだよ、うるさくしないで呉れ」

「え、御免なさい……でも、どうしたんでせう、お醫者に見せなすつたら」

「何んでもない、投^なつてて呉れ……」

「でも心配ですわ、もうおよりになつたら」

「……」

二人は可なり長い間の沈黙に落ちました。

「ウム、寝ようー」私はいきなり立ち上りました。(どうしたつて云ふんだ、煩さい！)

翌る日は研究室ではお咲は神妙にして、餘り噪がずに働いてゐました。そして私の視線を避けるようにしました。私は彼女をちらと見ると、ひとりでに、眼の奥が熱くなつて來ました。自分でも變

だなと思ひ乍ら、ほろ／＼と涙が出さうになるのです。午飯の時、彼女と視線が會つた時は、危ふく涙が迷る所でした。彼女も直ぐ眼をそらしました。

夕方退けになる時、彼女は加藤さんの前に立つて、馬鹿におとなしく何か喋り出しました。加藤さんは點頭き乍ら聞いてゐました。最後に「明日丈けは参ります」と、お咲の云ふのが分りました。

「お嫁に行くんぢやないのか？」加藤さんは笑ひ乍ら云ひました。

「いゝえ」彼女は狼狽て、顔を赤くしました。

「さうか、ぢや事務所へも話さない。惜しいなアお別れは」と、云つてから彼は顔を上げて部屋の人に聞えるように云ひました。「お咲さんはもう工場を止すさうですよ」

「さうですか、そいつは惜しいな、どうして止すんだい？」今歸りかけようとしてゐる同僚達は寄つて來ました。

「えゝ、家に事情が出來たの」

「本統か？ お嫁に行くんぢやないか？」皆は聲を揃へて笑ひました。私も一生懸命皆と一緒に笑顔を作りました。(あれ、斯んな事してる中に別れるのかな、もつと何んとかならないか。此の間は

三四日出ると云つたが、早くしたんだな、俺は何をぼんやりしてるんだ」

「送別會をやつてやらうか。別れのつらさだね」Hが叫びました。

「いゝのよ。明日又來ますわ、さよなら」彼女はいきなり、お胸の肩に手をかけて、後をも見ずに出て行きました。

「あいつは、お轉婆だつたが、よく働く女だつたね、いつも元氣がよくて氣持ちがよかつた。全く惜しいよ」と、加藤さんが云ひました。人々はばらばらに部屋を出て行きました。(さうか、もう行つたのか……)私は、冷却器クーラーに通してゐた水の水道栓をとめて、水煎器ワットの下の瓦斯を消しました。瓦斯の焰が思ひ切り悪く、すうつと小さくなつてから、ぽかつと音を立て、消えると、同時に私の眼から涙が一筋頬に傳はりました。私は狼狽ぼうたいしてハンケチを出して、鼻をかみました。……

家へ歸つても黙つてぼんやりしてゐました。妻はその夜は私に何も問はずに、彼女は何か下女を相手にして話してゐました。……

(今日はお咲とあの家で會ふことにしよう)と、考へ乍ら、會社に行きましたが、お咲は朝からそ

はく許りして私の處へは近寄りませんでした。同僚達は「お別れ」だと、何かしきりに彼女に言葉をかけました。十時頃でしたらう、又彼女は加藤さんの前に立ちました。

「ぢや、もうこれで歸らして頂きます、事務所へも今朝早く云つて置きましたから」

「さうか、晝飯丈けも喰べて行つたらどうだ」

「え、有難うございます。家で待つて居りますから」彼女はさつと下を見ました。

「ぢや、一寸待つた。餓別を上げよう！ よかないよ、一寸待つた」

同僚は寄り集まりました。四五歩向うにお咲は頸を垂れてゐました。私も同僚達と一緒にここにこし乍ら、墓口を出しました。

「一圓イチエンづゝでいゝでせう」加藤さんは低い聲を出しました。加藤さんは金を受け取ると、自分では多く出して十圓にして、彼女に近寄りました。

「これは少しだけれど、お咲さんがよく働いて呉れたからお禮だよ。又閑な時、此の部屋に遊びに來給へ」

「え、どうも有難う御座います」彼女は赤い顔をして叮嚀ていれいに頭を下げてから、金を受取りました。

「皆様、有難うございました。色々お厄介になりました」

「ぢや、さよなら。時々遊びにお出でよ！」賑かな聲がしました。

お咲はもう一度、皆に禮をしてから、私の方は見ようともせず、くるりと向き返つて戸口に近寄りしました。お胸も後から小走りに急ぎました。

「さやうなら」お胸と共に戸口を出て、戸をしめ乍ら、もう一度云ひました。

「さよなら！」Hの高い聲がしました。

「包装部から一人おまじな奴を引つばつて来るかな」と、加藤さんが笑ひました。

「一寸、お咲位の中々おませんよ！」どつと部屋中笑ひましたので、私も薄笑ひしました。(もう今日も會はずに、行つて了つたのか。矢つ張り、あれ切り、行つて了つたのか)私は窓から下を見下ろしたかつたのですが、近寄る事は出来ませんでした。同僚は又仕事にかゝりました。間もなく、お胸一人になつて部屋に這入つて來ました。……………

九

(あれ切りで行つて了つたのか)私はふらく／＼してゐました。その日の晝飯は、お胸一人で幾度も運びました。お咲がゐないと、火が消えたやうに静かになりました。私許りでない、同僚も張り合ひが抜けてゐるやうでした。

「全くあいつはお轉婆だつたね！」彼等は飯を頬張り乍ら話しました。一人になつてお胸は下許り見てゐるのです。……………

「山崎さん！ お宅からお電話でーすー」扉をあけて、パンキン小僧が叫びました。そして藥劑師のHにペロリと赤い舌を出して見せてから、自分の額をボンと敲いて、尻つぶり腰をして出て行きました。(お宅からつていふんだが、或はお咲ぢやないかな)と、私は胸がどき／＼するのを押へ乍らエレベーターに這入りました。

「はい／＼」私は受話器を取つてぶる／＼顛へたのです。

「あ、もし〜、あなた？……ね、今晚お祖父さんが妾達に御馳走をして下さるんですつて、でね、どうぞ少し早く歸つて、五時迄には家へ着くようにして下さい。……え、ジャスト五時迄……分りました？ ぢや、お待ちしますよ。さよなら……」

苦い顔をし乍ら電話室を出て、小僧が戸をあけて待つてゐるエレベーターに足を入れました。小僧はわざとらしいやうに口を尖んがらかしています。一寸時計を出して見たら二時になつた許りでした。

「一寸、家で用事があるさうですから、今日はこれで失禮します」私は部屋に這入ると直ぐ、加藤さんの前に立ちました。

「あ、さうですか、どうぞ。……御病人ぢやないですか？」

「いゝえ。今、あれのグロースフアター祖父が來てるんです」

「あ、成る程、今は議會がありますね」

私は一人で工場を出ました。一寸あの雑木林へ行つて見ようかと思ひましたが、研究室の窓から見えるやうな氣がして、足は方向を變へました。然し停車場へは向ひませんでした。

大久保の停車場近くの汚ない町を歩いてゐました。裏通りへ這入つたのです。直ぐ向うにはお咲の家がある長屋に這入る路次口があるのです、其處迄ふら〜歩いて來た私は、俄に胸がどき〜して來て、いよ〜その路次口の前に來た時、私はちらりと横目で見た丈で、通り過ぎて了ひました。誰の人影もありませんでした。

（ぢや、お咲をどうしようつて云ふんだらう……『フェガロの婚宴』、おゝ、變なものを思ひ出したぞ、『フェガロの婚宴』！……どうする〜『フェガロの婚宴』あゝ、畜生！）私は往來で飛び上がるやうにして、口の中で叫びました。（駄目々々〜）頭を強く振つて見てから、どん〜戸山ヶ原の方に急いでゐました。

あの原にも新しい草の芽は、下から持ち上つてゐました。遠くで兵隊が練兵をしてゐるのが玩具のやうに見えます、温かい日は射してゐるのですが、未だ誰も散歩に出てゐる人はありませんでした、私は葉がすっかり落ち盡くした雑木林に來て、去年の落葉の上に腰を下ろしました。向ふを折郊外電車が走つて行ききり、あとは物音一つしませんでした。

（……ぢや、美枝子と別れてお咲と結婚する〜）と、呟いて、はつと驚いて見ると、私の身體は幸

田の家から全く縛られてゐるのです。私の周囲は皆、幸田で固まつてました(だが、そんな事は問題でない。勿論、社会的には全く二度と立つ事が出来ない致命傷を受ける、然し俺はお喉を愛して、さうだ愛してゐるんだ、兎に角あいつなしには俺は生きてゐられなくなつた。……だが、お喉はあの通り全く無智だ、……でもな、無智でも何んとなく心から可愛い奴だ、それに俺はあれをスポイルして了つた。無智だと云へば美枝子だつて同じだ、唯、學校を少し許りやつたと云ふ丈で、全るで同じぢやないか……あゝあ……)私はごろりと仰向に寝て了ひました。(然し、あの裏長屋の娘を俺が妻にする……美枝子と別れる、美枝子だつて自分自身には何の罪がない、全く子供なんだ……)私は自分の身が、その儘、すうつと、地の中に吸ひ込まれて、誰れにも知られずに地上から消えて了へばいゝと思ひました。私は枯れ葉の上に轉々してゐました。折々電車が走つて行く響が地を傳はつて行きます。(あゝ、此の身體が地の中に消えて呉れ！自分さへなかつたら……)私は地から傳はる冷たさに、ぞく／＼しました。私は半身を起しました。然し、未だぼんやりしてゐました。……

私は立ち上りました。(あつ、美枝子に知れる)私は思はず外套を脱いで、その背中についたごみを叮嚀に、本統に叮嚀に拂ひました。そして又ぶら／＼歩き出しました。そして停車場に来て了ひました。

澁谷の停車場に降りた時、五時には間がありました。私は市内電車に乗らずに、ふら／＼黄昏近い寒い街を歩いて行きました。自分の家の近くに來ると、門の前に一臺の自動車がとまつてゐるのが眼に入りました。

(オヤー さうだ、しつかりしろー) 私は門を入りました。

「あゝ、丁度いゝ處へお歸りになりました。遅れなざるんぢやないかと思つて心配してましたの」美枝子は外出の仕度をして待つてゐました。然し案外喜んでゐませんでした。

「さうか、何處で御馳走があるの？」私は優しく訊きました。

「妾も知らないの、お祖父さんから、唯これに乗つて來いつて、自動車を寄越したのよ、運転手に訊いても、にや／＼笑つて返事しないのよ、祕密なんですつてさ」

「さうか」私は自分でも不思議に微笑んで見せました。

自動車の中に這入つて了ふと、私は黙りました。美枝子も黙つてゐるのです、それが意識して黙

つてゐるのが私にははつきり分つてゐるのでした。二人は息苦しい沈黙を續けて、軟かいクツシンの上に揺られてゐました。(屹度何か祕密がある) 彼女はさう考へてるに相違ありません。(あゝあ此の息苦しさ、此の俺の不幸と苦しみは何處から來るのだ)と、幾度も幾度も自ら問うてゐました。自動車は暗くなつた許りの冬の街を快い位の速力で走りました。青山から麴町を突きぬけて、九段の坂を下りました。賑かな電車通りも過ぎました。ふと止つたから、外をちらと見たら、須田町の交叉點でした。(あゝあ、俺はどうなる……) 又、私はクツシヨンに深く身を埋めました。

車は上野の山の暗の中に、廣いゆるいスロープを警笛を鳴らしつゝ突き進みました。

小さい金卸の並んでついでゐる制服を着た給仕が、帽子に外套やボアを受取つてから、叮嚀に一室に私達を導きました。餘り廣くない室には煖爐の火が、むつとする位ぬる温かく燃えてゐました。白いテーブル、クロスの上の眞中に、硝子の鉢に、綺麗な温室咲きの花の盛つてあるのが、明るい電燈の眞下に輝いてゐました。

「お祖父さんは？」美枝子は給仕に一寸訊きました。

「未だお見えになつてません、何れ。御用の時はお呼び下さい」油をつけて頭をてら／＼眞中から

分けた給仕は、腰から上を眞直ぐに折つてから、靜かに部屋を出て行きました。

「あら、詰らないわ」彼女はふんと頬を膨ました。

「でも、この花綺麗ねえ、ほんとに綺麗」

「ウム」

又二人は黙りました。窓にはすつかり青いカーテンが降りてゐます、明るい光りの下で部屋の中は、しんとしてました。

足音が近づきました。

「いや、永く待つたか？」給仕の明けた入口から、祖父が這入つて來ました。彼はもう七十近い老人ですが、やんとしてゐます、餘り脊の高くない瘦せた身體に和服を着て、袴をはいてゐました。圓い頭は毛が全く薄くなつてゐますが、鼻の下には眞白い髭が上品に短く刈り込んであります。そして薄黒い光澤のいゝ顔に微笑を浮べました。笑ふと眼尻に皺が寄るのは美枝子そっくりです。

私達は立ち上つて叮嚀に禮をしました。然し美枝子は直ぐ口を切りました。

「随分待ちほけさせられたわ」

「ウム、お祖父さんはこれでも中々忙しいんだよ、まアお掛けなさい」彼は愛想よく云ひました。

「どうです、中々いゝ天氣がつよくが厳しい寒さですな」

「え」私は唯それ切りで、言葉が出ませんでした。

「どうだ、駄々をこねないか？」老人は微笑をたゞへて美枝子を見ました。

「え、きまつてますわ」

「ウム」その時、三人の前には綺麗なグラスが置かれて、パンが運ばれました。給仕は白いきれで包んだ瓶から、透明な葡萄酒を注いで廻りました。一人の制服を着た給仕が腕に疊んだ白いきれを掛けて、部屋の隅に真直ぐに立つてゐました。

「どうぞ」と、老人が私に云つてから、妻の方を見ました。「どうだ、未だ赤ん坊は出来ないか？」と、笑ひ乍らグラスを臂に運びました。

「あら、お祖父さん、あんな事を仰有るの」美枝子は身體をひねつたやうでした。私は少し赤くなりました。

「だつて、お嫁さんになれば赤ん坊が出来るのがあたりまへだらう、はゝゝ」

「妾達には出来ませんわ」

「さうか……」

料理の皿が運ばれました。

「お忙しい？……」彼はナイフを動かし乍ら私に向ひました。「……忙しいのが結構です、あれで、あなたん處（きこ）の社長は中々やりますな……それに随分大きい事を云ふ、何んでも戦後の獨乙（ひとりご）がいくら踏ん張つても、東洋には一步も入れない、東洋の薬品の市場は俺（わし）の處（きこ）で獨占して見せると、云つてましたよ。實際日本の薬品は其處迄行つてますかな？」

「さア」と、云つてから、私は、日本は原料の國でないから駄目だとか、もつと化學工業は各會社がお互聯絡をとつて、廢物を無駄にしないようにせねば駄目だとか、又一國の化學工業の標準は曹達の消費高で定めるのであつて、日本はその曹達の原料である食鹽が專賣だから、到底競争が六ヶ敷いと、まア日本の化學工業の技師なら誰でも云ふやうな事を並べて喋りました。老人は「ほうほう〜」と、感心して聞いてゐました。

「原料が少ないからね、成る程。いや、俺（わし）はその原料で面白い事を思ひ出しました。實は原料のたゞ

のもので損をした事がありますわい。何時でしたかな、數年前だつたらうと思ふが、俺の處にある男が来てな、赤城山とかの頂上の湖水がすつかり凍つてると云ふんだ、それでさ、願ひさへ出せば、たゞで切り出すことが出来るから、一つやらして呉れつて云ふんでな、先づ原料がたいものだからやらして見たさ。で山の上から下迄、そら何とか云つた、ケーブルいやケーブルか、そのケーブルを架けてな、それで氷を下迄送ることになつてさ、人夫を澤山備つて、いよく切り出したんだ。處が、初めると間もなくそのケーブルが切れて了つてさ、又新しく造り直してゐる中に、肝心の氷がゆるんで了つたわい」と、彼は笑ひ出しました。私も美枝子を聲を出して笑ひました。

「それで俺の方は、人夫代と、そのケーブル代が全る損になつたのさ。まア、元が只のもので損をしたのは俺もあれが初めてだよ……」

老人はよく話す人でした。色々世間話をして呉れました。皿は幾度も代りした。私も二三杯葡萄酒を飲みました。そして満腹になりました。

「お祖父さん、妾達を吃驚させるつて、これつ切り？」美枝子は云ひました。

「ウム、これで澤山ぢやないか」

「あら、詰らないわ、斯んな牛の尻尾の料理なんか許り喰べさせられて」

「馬鹿を云へ、はゝゝ。ウム、今西瓜のアイスクリームをたべさせてやる」

「今頃の西瓜ぢや、どうせ臺灣西瓜でせう？」

「臺灣であらうが、何んであらうが、今期の西瓜だ……」

「あら、詰らない」

「何んだ、相變らずお嫁さんになつても駄々を云つてるな」と老人はさう云つても、眼に皺を寄せて微笑んでゐました。

實際、クリーム色の西瓜のアイスクリームを私共は小さい銀の匙で、舌の上に運びました。その時、給仕が、

「お電話で御座います」と、祖父を呼んで行きました。残された二人は、沈黙に陥りました。

「一寸」彼女は眞直ぐに立つてゐる給仕を招きました。

「これは、妾からですよ」彼女は給仕に五圓札を一枚渡しました。叮嚀に禮を云つた彼は、「御用があつたら」と、部屋を出て行きました。何か私達二人の間に祕密の話でもあるのだらうと察したら

しいのです。所が二人は益々手持無沙汰になつて、祖父が再び部屋に現はれる迄、黙つてゐました。

デザートも終りました。祖父は又これから何かの宴會に出なくてならないと云ふので、三人は玄関に出ました。

祖父一人は別な自動車に乗りました。私達の車は後になつて、動き出しました。

スロープをゆるく下る時、窓からちらと、下の池の端の青白い瓦斯の灯が私の眼に入りました。

(さうだ、何もかも美枝子に話してはう！ 後の事なんかどうならうとも、話してはうへば気が軽くなる) 私は危く言ひ出さうとして彼女の方を一寸見ましたが、彼女は彼女と眞直ぐ前の方ばかり見詰めてゐました。(ウム、お祖父さんの自動車と別れてからだ、その時云はう。美枝子にさらけ出すのが當然だ！)

須田町迄来た時、祖父の乗つた車は、その儘眞直ぐに走り去つて、私達のは九段の方へ向つて折れました。(さうだ、今だ！ 今云はなくては……) 然し又ボーズを置いて了ひました。(九段の坂を登つたら……もう登つた。電車通りに行く、さうだ此度向うから電車が来て、この自動車と擦れ違

ひになる時、あゝあゝ電車が来た……) 電車は通りすぎました。(今度の電車が来た時、云つて了はう、もう何もかも打ち明ける！……)

自動車は麴町から赤坂見附に一氣に下りました。幾臺の電車に會つたでせう！ もう青山の通りをどん／＼走つてゐるのです……

門の前で自動車を降りた時、

「これは差違からですよ」彼女は運轉手に札を渡しました。

玄関では叮嚀に手をついて下女が迎ひに出ました。

(あゝあ) 私は駆け込むやうに自分の部屋に這入りました。

十

朝、美枝子はぞく／＼する悪寒がして頭が痛むと云つて、床から離れませんでした。私は下女に色々指圖をしてから會社に行きました。愚圖々々してゐる中に、お咲は結婚して了ふ、或はも

うしたかも知れない、何故電話の一度位寄越さないんだ、何うにかしななければならない、そんな事許り考へて、矢張り愚圖々々してゐました。

(美枝子があの儘病人になつて死んで呉れたら、而も今日か明日だ！……でも何故俺は斯んなに苦しいんだらう、お咲は、あの櫻んぼのお咲は二度とこの部屋には来ないんだ、つい昨日迄、あんなに飛びはねては、俺に微笑の眼差しを投げて寄越したつけ……でも何故俺は斯う苦しいんだ！お、さうだ！) 私の眼の前の試薬棚には色々の毒薬の瓶はその化學記號を並べてゐました、私はぞつとして飛び退いて窓に近寄りました。昇汞、青酸加里、亞砒酸……それらの記號は、捕へようもなく頭の中で大きく擴がつて行きます、窓の外を見乍らちつと立つてゐる私は齒を喰ひしめても、足に力を入れて身體を眞直ぐにのべてもがたく、顛へて來ました。

美枝子の病氣は感冒だつたので三四日でよくなつて、起き上りましたが、それでも氣分が勝れないらしく、ふらくしては鬱いでゐました。その頃、私もぶらくしながら夕方家へ歸つて來ますと、めづらしくやゝ元氣に彼女は私に話し掛けました。

「今日ね、日本橋のある店から、斯んな物が着いたの」と、彼女は細長い硝子蓋のついた桐の箱を持つて來ました。中には二尺位の脊の、綺麗な着物を着た人形が眼許り光らせて立つてゐました。「お祖父さんが寄越したのよ。一寸可愛らしいんですわね……でもね、屹度此れはお祖父さんが、妾達に子供が出來ないんで、當てつけに寄越したのよ、ね、さう思はない？」彼女は淋しく笑ひました。……

研究室には一人の新しい女工を事務所から廻して寄越しました。部屋の様子が少しも分らないので、おどく許りしてゐる、貧相な女でした。お駒は今度は姉さんぶつて、何かと彼女に教へてゐました。……

「ね、ね、お咲ちゃんがお嫁に行つたのよ、お嫁に……」お駒は、釣り上つた細い眼の縁を眞赤にして、全るで別人のやうに部屋の中を走つて廻りました。

「さうか？ どうもさうだと思つた、どんな人ん處へ行つたんだ？」同僚等は好奇の眼を光らせました。

「何んでも煙草工場へ出てる、随分いゝお金を取る人なんですつて。あたい、此の間から噂は聞いてたんだけど、昨日、あたい丁度お喉ちやんがお嫁に行つた家の前を通つて、ひよつこり會つたのよ、皆さんに宜しくつて云つてましたわ」

「何處だ、何處だ、俺達も會つてひやかしてやり度いな」

「え」と、彼女はその家のある邊りを説明しました。私は眼を光らして聞いておりました。そして、その夕方、暗くなつてから私はふら／＼その家の近くを歩いておりました。私は毎夕、薄暗くなると足はひとりでその方へ行つて了ふのです。そして全く疲れ切つて、家へ歸ります。その頃でせう、美枝子が河野さんの處にたづねて行つて、私の心を訊いて呉れと願つたのは。彼女は氣分が勝れないと云つて、婆やを連れて興津へ行きました。

お駒はお喉の嫁入りを皆に傳へた日は妙に噪いでおりましたが、次の日から却つて元よりも元氣がないやうに淋しい顔をしておりました。そして四五日すると、ふつ／＼と會社に來なくなりました。「どうしたんだらう？」同僚達は不思議がつて首を傾げました。三日許り休んでから或る日の晝近くにお駒は突然研究室にやつて來ました。そしてにや／＼笑つたと思ふと私の實驗臺の處に來て、

こゝまつて、臺の下の戸棚の戸を明けて何かしきりに探し初めました。

「どうしたの？」私は吃驚して問ひました。同僚達も變な顔をしながら見ておりました。

「あら山崎さん、山崎さん、あたいの荷物をどうしたの？」彼女は眞顔でさう云つてからにた／＼笑ひました。

「荷物？ 知らないよ」

「あら／＼」彼女は又こゝまつて、戸をがた／＼そつちに明けたり、こつちに明けたりしました。

「あら／＼ないわ、どうしませう！ 山崎さん、どうしました？……あら／＼、あたい皆さんにそれはいゝ物どつさり買つて來て、此の中に藏つて置いたのよ！」

「お駒さんどうしたんだ！」加藤さんは近寄つて、彼女の肩に手を掛けました。彼は心配さうな顔をしておりました。

「あたい、皆さんにそれは立派な物を買つて來て置いたのよ」

部屋の人々は呆氣にとられて、立つた處から一步も動かすに見て居りました。

「あつ！ こいつはいけない！」加藤さんは彼女の眼を覗き込んでから叫びました。「お駒さん、よ

しく、一寸こつちへお出で、ね、ね、いゝ子だ」彼は、たく笑つてゐるお駒の背中に手を掛けて、覆ひ被さるやうにし乍ら、部屋を連れて出しました。人々は未だ呆然として立つて見てゐました。加藤さんは向うの細菌室の醫者の處に彼女を連れて行つたらしいのです。

「何んだ、氣が狂つたのか！」誰かが突然叫びました。……

「可哀さうに」可なり時間がたつてから、加藤さんは一人で部屋に歸つて來ました。「矢張り、氣が狂つたんだ。春になる時だからね……今小使に送らせて家へかへしてやつた」

私は何となく涙が出て來るやうに哀れつぽくなりました。部屋の人々も變に狐につまゝれたやうな顔をしてゐました。

研究室では又一圓づゝ集めて、見舞をやる事にしました。

「加藤さん、僕が見舞に行きませう」と、私の方から云ひ出して引受けました。何となくお駒が可哀さうだつたのです。

「さうですか、君行つて呉れますか」

「え、行きませう」

私は皆よりやゝ早目に工場を出て、事務所でお駒の家を訊いてから、淀橋の町に行きました。

一軒の自轉車修繕屋の店で、今點いた許りの電燈の下で、一人の、油でよごれた服を着てゐる若い者が自轉車の掃除をしてゐました。

「お駒さんの家は此方ですか？」

「え、さうです」

「會社から來た者ですが」

「あ、一寸待つて下さい……お上さん」と、若者は奥の方へ聲をかけました。

私は壊れた自轉車や色々の道具が亂雑に投げたある土間を通つて、奥と云つても一室しかない部屋に通されました。

「まア、わざ／＼恐れ入りました御座います」はだけた胸の邊りを手早く合せて、ぐらく／＼に動く丸鬚を振り乍ら、お上さんは後れ毛を手で掻き上げました。「さア、どうぞお坐りなすつて。斯んなむさ苦しい處で恐れ入ります」

「いゝえ。お駒さんの様子はどうですか？」お駒は薄暗い部屋の隅に蒲團を被つて、向う向きに寝

てみました。

「え……妾もほんとに吃驚しまして御座いますよ。三四日前から、突然近所の方々の店から、何だか詰らない物を買ひ込んで参りましてね、え、金を拂はずに『家から拂ひますよ』つて、持つて來るんで御座いますの。襟だとか飾りピンだとか、白粉やなんかね。店からは『今此方の娘さんにこれこれのものを上げたが』つて、お金を取りに來るんで御座いますよ。もうどうしたものかと思つてほんとに吃驚して了ひました。それで當人は平氣でにや／＼笑つて、常になく元氣なのですから。え、あれは妾の腹を痛めた子ぢやないので御座いますから隣り近所から、妾が辛く當つて氣狂ひにしたりでも云はれたら、どうしようと思ひまして妾ももう氣が氣ぢや御座いませんの……え、全く困りまして御座ります……何の魔がさしたものでせうか……ほんとに……』お上さんはさう喋り乍らも、私に茶を注いで呉れました。家の中には父親らしい人も、それから連れ子の妹も見えませんでした。

「それはお困りです、會社でも皆が驚きまして、それでお氣の毒だつて……此れは少々ですが研究室のみんなからのお見舞です、どうぞお取り下さい」私は紙に包んだ金を出しました。

「まア、恐れ入りましたして御座います、斯んな御心配を戴いては、來て戴いたわけでもう澤山で御座いますのに……」その時、「あら、山崎さん！」と、お胸は蒲團の中から私の方を見ました。

「山崎さん、一寸こつちへいらつしやい！」彼女は寢巻姿で蒲團の上にもく／＼起き上つて、坐りました。

「まア、なんですね、その姿は……此の通りなんで御座いますからね」

「山崎さん、いらつしやいよ、一寸此處へ」

「行つて上げませう」と、私はお上さんに囁いて彼女の枕元に近寄りました。枕元には、白粉やその他の化粧品の箱や、花簪や、赤い財布や絹ハンケチが並べて置いてありました。

「山崎さん、ちよつとこれ見て頂戴！」彼女はにや／＼笑つて嬉しさうに、其等の品を指さしました。

「ね、あたい昨日、小間物屋へ行つて、小僧さんに色々出させて餘り見散らかしたからね、小僧さんにおすしを五十錢買つて、餘り迷惑をかけたから喰べて頂戴つて上げて來たの、ね、一寸、あたい成金のやうでせう！」彼女は私の顔を覗きました。私ははつとして顔を下げて了ひました。お上

さんは傍からはらく／＼してゐるやうでした。

「ね、母さん！ 此の山崎さんね、そら、あのお咲ちゃんといふ仲なのよ！」

「まア、何んですね！ 此の子は……此の通りなんですから何卒悪からず」お上さんは、顔がかつとして、全く狼狽してゐる私に愛想笑ひをし乍ら、恐れ入つたやうに言ひ譯をしました。

「ほんとよ、ほんとよ、母さん。だつてお咲ちゃん前から、あたいに自慢してたんですもの」

私は洋服の膝を窮屈に坐つたまゝ、身のやり場がなくなつて了ひました。

「まア、何んです！ お駒……斯んなお立派な方に何を云ふんです、さア、もう、お寝み！」お上さんは「ほんとよ、ほんとよ」と繰返してゐるお駒を無理に寝かして、蒲團を被せました。

「まアほんとにこの有様なんで御座いますから、何卒悪しからず思召し下すつて……」お上さんは私の前に一寸頭を下げました。

「え、え」と、私は全く狼狽へた返事をしてから、枕元を去つて、元の席に戻りました。「どうぞお大事に」私は、追ひ立てられるやうな心持ちで頭を下げました。

「ほんとにわざ／＼恐れ入りました御座います。あの通りなんで御座いますから、何卒お氣にとめ

ないで……では皆様に呉々も宜しくお願ひ申します……」

私は右から穿かうか、左からはかうかと躊躇して、靴を大急ぎにはきました。そして内ポケットに手を入れて、紙入れから五圓札を引き出しました「これは私から、何かお駒さんの好きなものを買つてやつて下さい」と、遠慮するお上さんに渡しました。其處に両手をついて、叮嚀に禮をするお上さんを見てから、私は黄昏の外に飛び出しました。(あゝあゝあゝ) 私は後から人々に大きな口をあいて、から／＼笑はれてゐるやうに、身を縮め乍ら、後をも見ず急ぎました。私は身の底がふうつと、恥かしさが込み上げて來ました。(あゝあゝあゝ) 危なく大聲を出して叫ぶ所でした。

(ぢや、お咲を連れ出して、何處か遠い處に逃げて行くか！) 私は何處とも分らない街を、足が地に着かないやうな心持ちで歩いてゐました。(お咲の今の亭主は俺にスポイルされた女とは知らないでゐるのだらう、あゝあゝあゝあゝ、何と云ふ俺は恐ろしい奴だ！ 俺は美枝子もお咲もスポイルして了つた。……でも、可愛いお咲、あの小麦色のぶく／＼した顔つべた。そして俺に何もかも投げ出したんだ……お咲を奪ひ取つて逃げる……遠い處に逃げる……) 私は全くしどろもどろになつて歩いてゐました。電車の通つてゐる、明るい賑かな街に來てゐました。(あつ！ 彼處に明るい家が

ある)私は電氣の灯が硝子の器具に沁むやうに光つてゐる家に、吸ひ込まれるやうに這入りました。

「おい、ウキスキー！」

頭はがん／＼痛んで来ました。又外に出て春が来る宵の風に吹かれて暗い通りに折れました。ひとりでに涙が出て来ます、拭つても拭つても、後から後からと流れます。

青山の原を歩いてゐました。頭は餘程静まりました。(いつそ、お咲からも美枝子からも逃れて、一人外國へ行かうか？ 然し、俺はもつとしなければならぬ事があるやうだ。俺は全くアップノルマルな人間だ！ 全くアップノルマルだ！ あゝ、あのお咲の櫻んぼ、俺はどうすればいいんだ！……)

どんなに自分の心と闘つても、夕暮時になると、私はふら／＼お咲の家に近寄りました。暗の中で、息をこらし乍ら眼を光らしてゐるのです。でもお咲には會ふ事は出来ません。私は全身耳にして中の様子を窺てゐるのです。もし、もしかの事、新しい若い夫婦の嬉しさうな聲でも洩れて來たら、

私はどんな事をするでせう！ あゝあ、それでなくとも……全身耳にしてゐるのです、思はず飛び退いて、溝板にがたりと、つまづく、私の心臓は飛び上つて駆け出しました。斯うして昨夜に迄なりました……。で、昨夜も、昨夜もです、あのコルベン會に行つて、かへりに河野と話して、三丁目で私は電車に乗りました。私は矢張り新宿の終點迄來て了つたのです。そして、あの生温い風に頬を打たれ乍ら、暗い街に來ました。いつの間にか横丁に這入つた私は、裏通りを歩いてゐました。私は或る豫感にぶる／＼顫へたのです。私の後から小走りに急いで來る足音がします、私はすつと家と家の間の暗い處に身を隠しました。暗にすかして前を過ぎようとする姿！ それは正しくお咲でした。私の胸はどきんとして、聲が出ませんでした。

「……咲ちゃん……」

「あらっ」

「静かに、静かに」私は夢中で彼女を暗に引き込みました。彼女は首垂れて、前垂を両手をいぢつてゐるのが暗の中にもほつきり分りました。私は彼女の肩を引き寄せました。彼女は顔を上げて、櫻んぼの唇につこりと微笑を浮べました。私は息苦しくなつて離しました。彼女はさつと頭を下

げました。

「ね、こんな處に來ちやいけないのよ、ね、いけないのよ……」

「ウム」と答へた私は、頭がぐらくつとしました。

「ね、どうぞね」

「さよなら」俄に私は頭を下げて、ぼくりと禮をしました。其の場をひらりと離れると、暗の中を全速力で走り出しました……。

大正十一年十二月一日印刷
大正十一年十二月十日發行

(定價壹圓貳拾錢)

◀ 痕 傷 ▶

著 作 者

伊 藤

靖

發 行 者

東京市牛込區矢來町三番地
佐 藤

義 亮

發 行 所

東京市牛込區矢來町三番地
新 潮 社

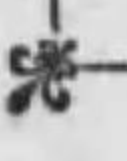
電話番町
八八〇〇
九八七番番

番二四七一(京東)替攝

印 刷 所

東京市小石川區西江戸川町
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社
印刷者 佐々木俊一



豊島與志雄氏著

長篇小説 反抗

價壹圓七拾錢、送料拾錢

吉田絃二郎氏著

長篇小説 白路

價壹圓八拾錢、送料拾錢

伊藤 靖氏著

長篇小説 發掘

價壹圓五拾錢、送料拾錢

一人の青年と、一人の若き人妻との、細やかなる戀の心理を描いたもので、肉の戀でもなく感情の戀でもない。それは實に靈の戀、第六感の戀である。斯くの如き題材は正に此の作者独自の領域、見えざるに見、聞えざるに聞く、幽深微妙の境地は、茲に遺憾なく開き示されてゐる。

某學校教師と其の妻との、傷ましき同棲生活を材とし、人間愛慾の悩みを主題となし、哀趣脈々たる筆を行れる長篇である。愛せんとして愛し得ず、憎むには餘りに哀しき此の人と人との生活を滿眼の涙を以て打ち眺むる作者の姿は、何人をも強く打たすには置かないであらう。

愛兒の爲に操を賣つて亂倫を恥とせぬ母と、其淺ましき姿に哭く子なる青年との悲痛なる葛藤を主題とし、配するに人妻に弄ばるゝ薄志弱行の青年、聰明で美しい女學生等を以てし、暗鬱な人間生活の種々相を、悲痛な主観に裏附けつゝ、次から次へと展開せる、新人の新篇である。

志賀直哉氏著

長編小説 暗夜行路

全二冊 ◆前編發行

小説壇の第一者として、我が日本文壇の誇りとして、珠玉の如き短篇に、無類の手腕を示しつゝある志賀直哉氏が、その全力を集中して、初めて公にした長篇は是れである。祖父と母との不倫の關係に生を得た、憂鬱な、敏感な一青年を主人公として、その暗い運命の影におのゝぎつゝ、迎り惱む人生の行路を描いた此篇は、その思想の深刻に於いて、その描意の洗煉に於いて、而して、その結構の緊密に於いて、まことに間然するところなき傑作であることは、夙に定評が存する。我が文壇も此の作を得て、はじめて精彩の突々たるを見るであらう。

彼の結婚と其後

武者小路實篤氏著

四六版特製 定價貳圓 四百五十頁 送料拾錢

「世間知らず」彼の三十の時」の二長篇を収む。前者は、作者の處女作とも云ふ可きもので、作者自身の結婚を材料として書かれた眞摯熱切の戀物語である。後者は三十歳の頃の生活を如實に記録せるもの。希望に燃え、憧憬に躍る、作者身邊の若い藝術家の如く、その生活を清寫して遺憾が無い。二篇を合はして八百枚に近い長篇である。

紙表綴糸 全四冊 價貳圓五拾錢 ◆送料貳拾錢

現 代 詩 人 叢 書

【第一編】	沈黙の血汐	野口米次郎氏著
【第二編】	蠟 人 形	西條八十氏著
【第三編】	預 言	川路柳虹氏著
【第四編】	田舎の花	室生犀星氏著
【第五編】	季節の馬車	佐藤惣之助氏著
【第六編】	青き樹かげ	三木露風氏著
【第七編】	炎 天	千家元麿氏著
【第八編】	澄める青空	生田春月氏著
【第九編】	風 車	百田宗治氏著
【第十編】	愛 慕	白鳥省吾氏著

◆定価一冊六拾錢 ◆送料一冊六錢
—紙數一冊六百十頁—

中 篇 小 說 叢 書

【第一編】	潮 風	里 見 彈氏著
【第二編】	剪られた花	佐藤春夫氏著
【第三編】	世の中へ	加能作次郎氏著
【第四編】	明暗の街	谷崎精二氏著
【第五編】	走馬燈	室生犀星氏著
【第六編】	二人の彼	武者小路實篤氏著
【第七編】	露 芝	久保田万太郎氏著
【第八編】	山 戀	宇野浩二氏著
【第九編】	破 婚	宮地嘉六氏著

◆短篇と長篇との間をゆく二百枚前後の讀切小説。文壇未曾有の新叢書

◆四版◆六百十頁◆價七拾七錢◆送料六錢

世界文藝全集

約一百卷の豫定、空前の大叢書也。
 四六版總洋布天金最上製一册六百頁
 定價一册五拾錢送料一册拾貳錢

譯壇空前の偉觀

第一編 □ ボヴリイ夫人	フロオベル著 中村星湖氏譯
第二編 □ 辛ルヘルム・マイステル(前)	ゲエ 清氏譯
第三編 □ 神々の死	メレジュコフスキイ 米川正夫氏譯
第四編 □ 赤い部屋	ストリンドベルヒ著 阿部次郎氏共譯 江馬修氏譯
第五編 □ ギルヘルム・マイステル(後)	ゲエ 清氏譯
第六編 □ 神々の復活	メレジュコフスキイ 米川正夫氏譯
第七編 □ ナナ	エミール・ゾラ著 宇高伸一氏譯

517
75



577
75

終